



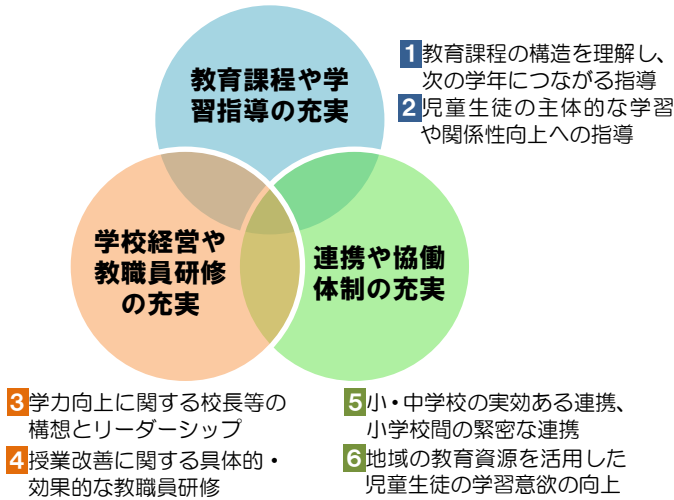
# 学力の一層の充実に向けた 6つの提言

～小中9年間を通した学びの連続性を重視して～



京都府丹後教育局

学力の充実・向上に向けて重視したい視点



管内の学校では、学力向上プログラムの作成や教職員研修など、様々な学力向上策が精力的に取り組まれています。また、比較的小規模であることを生かした柔軟で組織的な学校運営、学校数の減少による学校間・校種間で連携しやすい環境など、多くの特徴もあります。

丹後教育局では、このような管内の学校の特徴や強みを基盤として、学力診断テスト等の分析や京都府教育委員会の方針を踏まえ、今後さらに学力の充実を目指すための視点を「6つの提言」としてまとめました。

1

子どもの発達の特性と教育課程の構造を理解し、次の学年につながるように指導方法を工夫する。

学習指導要領は、子どもの認識力の発達の特性を踏まえ、義務教育9年間の連続性を重視して策定されています。その構造を理解した上で、9年間それぞれの段階における効果的な指導を工夫し、次の学年の指導につなげることが必要です。



視点の例

- 学習指導要領や自校の教育課程（指導計画）の縦のつながりを研修し、単元の指導に生かす。
- 抽象的・論理的な学習の指導を段階的に行うため、授業研究で各学年の指導方法を系統化する。
- 抽象的・論理的な学習が増える小学校5年生を前に、4年生の1年間をかけて学校体制で基礎的・基本的内容の完全定着を目指した取組を行う。
- 中学校区において、9年間を通した系統的な家庭学習の指導プランを作成し、中学校区全体で家庭と連携した指導を進める。

2

教科・領域の指導において、言語活動を重視し、学び合いや児童生徒相互のコミュニケーションを重視した授業づくりをする。

京都府学力診断テスト結果において学力向上に効果が見られる学校では、どの学力層の児童生徒も意欲をもって学習することができています。その要因のひとつに、児童生徒が言語活動等を通して主体的に学ぶことや、児童生徒相互の良好な関係づくりが授業で重視されていることが窺えます。



視点の例

- 言語活動を基盤にした「学び合い」を重視し、問題解決や習熟の場面で児童生徒が相互に学び合ったり教え合ったりする活動を授業に取り入れる。
- 授業における生徒指導の視点を重視し、「学び合い」や「教え合い」、児童生徒への肯定的な評価等により、児童生徒の人間関係を深める。
- 45分間・50分間で、習熟の場面を含めて学習内容の理解・定着を図る授業を行う。

3

目標とそれに対する評価を事前に具体的に定め、それをつなぐのが「指導」であるという考え方を学校全体で共有し、浸透させる。

学力診断テストで過去4年間府平均よりも上位にある学校は、目指す子どもの姿を明確にし、それを全ての教職員で共有しています。また、課題解決の方針が具体的で実践可能なものになっています。



視点の例

- 自校の学力課題を教職員全員で確実に共通理解し、授業づくりの方向性や授業改善の方針を一致させる。
- 学力向上プログラムにおける取組の目標を具体的なものにし、事後に評価できるものに見直す。
- いつ、どこで、誰が進行管理するかを明確にしておく。

4

教職員研修の幅を広げる。

校内研修を一層充実し、自校に授業実践を大切にする風土をつくることは重要なことです。教職員研修を今以上に充実するために、学校や教科の枠を越え、研修の幅を広げ質を高める工夫が効果的です。



視点の例

- 小・中学校、小学校合同で授業参観や授業研究を行い、他校・他校種と課題や目標、実践を共有することで、自校の授業改善を一層前進させる。
- 中学校区において小学校合同研修会を実施し、小学校間の指導の統一性を図る。
- 中学校では、授業参観の視点を工夫し、学校全体や学年での授業研究を実施する。
- 自校の授業力を向上させるため、中学校区に加配されている教員や指導力のある教員を相互に活用した授業研究を実施する。

5

小中連携では、同じ中学校区内の小学校間の連携を重視する。

「質の高い学力」をはぐくむためには、小・中学校の9年間を通して系統的・連続的に指導が積み上げられることが不可欠です。そのためには、9年間を通した目標を設定し、中学校区における指導に一貫性や統一性を確保する必要があります。



視点の例

- 学力診断テスト等で課題の多い単元や重点とする単元では、中学校区内の全ての小学校が共通した指導方法で指導できるよう、学校間で指導を統一する。
- 学習規律や学び方、家庭学習の習慣が9年間を通して着実に身に付くように、中学校区内の全ての小学校が統一した内容で段階的に指導する。

6

地域の人的資源を活用し、地域の人々との豊かな出会いを大切にする。

丹後地域の自然や文化等の学習・体験にとどまらず、地域で懸命に生きる人々との豊かな出会いを仕組み、児童生徒の将来への夢や希望をはぐくみ、学習意欲や自己肯定感等の醸成につなげることが重要です。



視点の例

- 出会った地域の人々の生き方・在り方に目を向け、共感や尊敬、憧れをはぐくむ。(学習支援ボランティアの活用、小学校における職業体験、総合的な学習の時間の工夫)
- 学校や校種を越えて、異年齢での交流や学び合いの場をつくることにより、自己肯定感や自己有用感を高める。(異年齢交流、プラスワンスタディの活用)